

麻田連陽春の和歌と漢詩：「麻田連陽春伝考」 続

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 富吉 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1274

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



麻田連陽春の和歌と漢詩

——「麻田連陽春伝考」続——

川 上 富 吉

一、はじめに

麻田連陽春の文芸作品は、次の三群（『萬葉集』に和歌四首・『懷風藻』に漢詩一首）である。

A

大宰帥大伴卿の、大納言に任ぜられて京に入る時に臨み、府の官人等の、
卿を筑前国の蘆城の駅家に 餞 せし歌四首

岬廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が思へる君 （4・五六八）

右の一首は、筑前掾門部連石足。

韓人の衣染むといふ紫の心に染みて思ほゆるかも （4・五六九）

大和へに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿もとよめてそ鳴く （4・五七〇）

麻田連陽春の和歌と漢詩

右の二首は、大典麻田連陽春。

月夜よし川の音清しいざここに行くも行かぬも遊びて行かむ（4・五七二）

右の一首は、防人佑大伴四綱。

B

大伴君熊凝の歌二首 大典麻田連陽春の作

国遠き道の長手をおほほしく今日や過ぎなむ言問ひもなく（5・八八四）

朝露の消やすき我が身他国に過ぎかてぬかも親の目を欲り（5・八八五）

C

外従五位下石見守麻田連陽春。一首。年五十六。

五言。藤江守の「裨叡山の先考が舊禪處の柳樹を詠む」の作に和す。一首。

近江は惟れ帝里、裨叡は寔に神山。山静けくして俗塵寂み、谷間けくして眞理專にあり。

於穆しき我が先考、獨り悟りて芳縁を聞く。寶殿空に臨みて構へ、梵鐘風に入りて傳ふ。

烟雲萬古の色、松柏九冬に堅し。

日月荏苒去れど、慈範獨り依々なり。寂寞なる精禪の處、俄かに積草の堀に爲る。

古樹三秋に落り、寒花九月に衰ふ。唯餘す兩楊樹、孝鳥朝夕に悲しぶのみ。（藻105）

Aは大宰帥大伴旅人卿の餞宴歌四首中の二首。Bは次に「敬みて熊凝の為にその志を述べし歌に和せし六首序を并せ

たり 筑前国守山上憶良」(5・八八六～八九一)とセットになる二首。Cは民部卿兼近江守藤原仲麻呂の作詩に和した詩一首。訓読は、新日本古典文学大系本『萬葉集』、日本古典文学大系本『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』に拠る。

以下、三群の作者、陽春とその周辺人物との文芸作品を主とした伝記的考証⁽¹⁾をしてみることにする。

二、A(4・五六九、五七〇)について

この二首は、題詞によれば、大宰帥大伴旅人が大納言となつて上京するに当つて、府の官人たちが、筑前国蘆城の駅家で送別の饗宴の席で披露された歌四首中の二首である。旅人が大納言に任ぜられたのは『公卿補任』には「天平二年(七三〇)十月一日」とあり、『萬葉集』には「天平二年庚午の冬十一月、大宰帥大伴卿の、大納言に任ぜられて帥を兼ねるところ⁽²⁾と旧の如し。京に上りし時に」(17・三八九〇題詞)・「(天平二年)冬十二月、大宰帥大伴卿の京に上りし時に」(6・九六五題詞・九六六左注)・「書殿に饗酒せし日の倭歌四首(5・八七六～八七九)・「聊かに私懷を布べし歌三首(5・八八〇～八八二。天平二年十二月六日、筑前国司山上憶良謹みて上る。」・「天平二年庚午の冬十二月、大宰帥大伴卿の、京に向かひて上道せし時に作りし歌五首(3・四四六～四五〇)」とあり、陽春の二首目(五七〇)に「大和へ君が立つ日の近づけば」⁽³⁾とあるので、十一月中の饗宴であつたと考えられる。饗宴の場「蘆城駅家」(福岡県筑紫野市阿志岐。府の南約四キロメートル。)は、「五年戊辰、大宰少貳石川足人朝臣の遷任するに、筑前国の蘆城の駅家に饗⁽⁴⁾せし歌三首(4・五四九～五五二)」及び旅人上京時「⁽⁵⁾廉従等別に海路を取りて京に入りき。(17・三八九〇題詞)」・「天平二年庚午の冬十二月、大宰帥大伴卿の、京に向かひて上道せし時に作りし歌五首(3・四四六～四五〇)」に、「⁽⁶⁾鞆の浦(広島県福山市鞆町の瀬戸の海浜)」・「⁽⁷⁾敏馬の崎(神戸市灘区岩屋付近)」とあり、瀬戸内海への海路の出航の近くの駅家であつたことと、饗宴の場として恒例となつていたことがわかる。

A群の一首目（五六八）は、これからの船旅の岬々の荒磯に立つ五百重波のように、立っていても座っていても、何時も心から去らぬ我が君です、と旅人の海路を辿ることを前提とした予餞の心を歌っている。

二首目（五六九）は、初句「韓人」は原文「辛人」⁽³⁾で、「韓・唐」に「辛」を当てたもので「漢人（19・四一五三）」の例もある。染色技術は「韓」「唐」が遙かに高度だったので、「韓人の衣染むといふ紫の」と言う。当時正三位の旅人は、大宰府にあつてただ一人、衣服令に定める紫衣着用の資格を有していた。⁽⁴⁾（新大系、注）ことから、前歌の「我が思へる君」を承けて「衣染むといふ紫の心に染みて思ほゆるかも」と和したもの。「正三位旅人はこの時実際に紫の衣を着用して座していたのであろう。」（釈注）と言うが、「衣服令」諸臣礼服条に「三位以上は、浅き紫の衣。」「大祀、大嘗、元日に、服せよ。」・朝廷の公事に着用する朝服条に「五位以上、衣の色は礼服に同じ。」「朝廷公事に、即ち服せよ。」とあつて、馭家での私的な餞宴に着用することは有り得ない。⁽⁴⁾ 実際に着用していないのに、紫衣を着ているように見立てるところに、この作者陽春の心用意があるということ、で、「府の貢上染色所において渡来系の人びとが多く染色加工に携わっていたから」「管内諸国の国司の紫草園巡察の監督のために同行したかもしれぬ経験」「府管内諸国の各地に紫草園が設けられていたとすれば、かなりの数に上るから、手入れ時の国司巡視の監督としては、大式・小式のみならず、大監・少監、大典・少典なども動員されたことが推察される。」という指摘⁽⁵⁾が大いに参考となる。

三首目（五七〇）は、「鹿もとよめてぞ鳴く」について、旅人は十一月大納言に任ぜられ十二月に上京したので「実二ハ鹿ノ鳴時ニ非ズ」「敬フヘキ人ナル故ニ、我身ヲ鹿ニナシテ別ヲ慕ヒテ泣ヲヨメルナラン」（代糶）・「鹿が妻を恋うて鳴くのは十二月ではなく、秋が普通である。」（集成）とされていたが、『全注巻第四』（木下正俊）は、宗政五十緒氏の説（短歌誌「あけぼの」昭和五十一年月例会要旨）を紹介し「詩経小雅の「鹿鳴」によったものであろう。詩経小序によれば、小雅はこれを以て群臣嘉賓を燕（宴）する詩としている。宴会の歌であれば、鹿が鳴かなくても、それにかけて詠んだ歌と考えることができる。」とし、『釈注』も賛同し、『新編全集』も「冬の時期に鹿が鳴くように詠んでいるのは『毛詩』小雅の

「鹿鳴^{めい}」によったもので、その小序にこれを群臣嘉賓を宴する詩としている。」とし、『毛詩』小雅の「鹿鳴」第一章、「呦呦鹿鳴、食^三野之苹^六。我有^三嘉賓^一、鼓^レ瑟吹^レ笙。」に拠って上司旅人との別れを惜しんだものと考えられる⁶。として、注で前漢蘇武の「詩四首（『文選』卷二九）の第一首、「鹿鳴思^三野草^一、可^三以^レ喻^三嘉賓^一。我有^一罇酒^一、欲^三以^レ贈^三遠人^一。」と旅ゆく兄弟をもてなすことが述べられている。陽春は中国の先例を踏まえ、鹿の鳴くことに、心に適う立派な人物を見送る宴としての意味を込めた⁷。とする蘇武^{そぶ}の詩句の指摘を承けて、内田賢徳は、「李陵^{りりよう}との友人同士の間柄でのものであり、それよりは、『毛詩』小雅「鹿鳴」の第二章を参照する方がよい。」（第二章、省略。注6参照）として、

ここの賓客は德音、つまり徳の高い人であり、民に手厚い恵みを施すので、民もそれにならない、またこの宴の主人（君子）もそれにならうと、賓客の慈愛深い徳を称える。この章を踏まえて、陽春は、「大和辺に 君が立つ日の近づけば」というのでここに集って饞宴を催している一同は皆旅人の徳を慕っている者ばかりだと称える。第二首が姿から象徴的に印象づけられる旅人を称えるのに対し、この歌では、より内面の人格に関わって旅人を称えている。

とし、「陽春の二首は、まさしくこの歌群の主題たるにふさわしい品格と、教養を示す二首である。」と評価している。ただし、富原カンナ論文及び内田賢徳論文の前年に、馬駿「漢籍との比較から見た「鹿鳴」の歌——その巻頭性と表現性を中心に——」（『国語国文研究』105号。一九九七年三月刊⁹）が発表されている。そこでは、漢籍と『懷風藻』¹⁰に、『毛詩』小雅の「鹿鳴」の「飲宴」（『藻60』）と、『文選』蘇武の「別詩」の「別宴」（『藻63』）での「鹿鳴」の相異を示し、陽春の「鹿鳴」の一首は、惜別の「別宴」である点で、『毛詩』小雅の「鹿鳴」の「飲宴」の詩ではなく、『文選』の蘇武の詩と『懷風藻』63の詩にみるように、「蘇武の詩に暗示を得たもの」と見るべきではないかとし、さらに、「五六九」の「紫」に、「紫草を草と別く別く伏す鹿の野はことにして心は同じ」（12・三〇九九）を引き、「連作のこの二首において、各々「暗喩」

と「典拠」の修辭法で大伴旅人への思慕と惜別の情を婉曲に表現するところに作者の意図が見て取れるのではあるまいか。かくして、麻田陽春が饞別の宴席で「鹿鳴」の歌を披露した際、歌壇の宰領者である大伴旅人は会心の一笑を報いたに違いない。」という、まったく同感である。さらに、典故の教養を越えてこの歌の第三句「近づけば」は、元、桂、類「ちかければ」とあり、結句「鳴く」の一語との照応、「何たる面白い措辞であらう。齒を喰ひしばって切羽詰るまで泳へた我慢が、とう／＼破裂して泣くより外はないといった調子である。」（金子評釈）惜別の情の頂点を歌って絶唱であるといえよう。また「（行く人の）立つ日」に「（送る人の）立つ鹿」が「とよめて」（声を立てて）鳴くというよく出来た歌である。

四首目（五七二）は、初句、元「つきよろし」・攷「ツクヨヨシ」とある。第二句原文「河音清シ」「かはのおときよし」字余り諸説あり。寛、矢「カハヲトキヨシ」、桂、元、類、神「かはおとすめり」、桂、類「かはのおとすめり」、童、檜「カハトサヤケシ」、略「カハノトキヨシ」。「かはおときよし」を良しとしたい。第四句原文「行毛不去毛」、代圀「字二任セテユカヌモト読ヘキニヤ」攷・古「ユクモユカヌモ」。童・檜・寛「トマルモ」。新大系に「送別詩に旅行く者と留まる者を「去留」「去住」「行住」などと表現するのと同様するかも知れない。第四・五句「ゆく」という言葉を、原文「行」「去」「帰」と、三種の文字で表わしている。」とあり、「行くも行かぬも」を良しとしたい。「月夜もよいし、川の音も清らかだ、さあここで、都へ行く人も筑紫に留まる人も、楽しく遊んで太宰府へ帰ることにしよう。」という意で、別れを惜しむ前歌（五七〇）を承けて、「沈みがちな座を取りもとうとした歌で」、「遊びて行かむ」の一句に、「目下の饞宴が今の別れではないことが示されている⁽¹¹⁾」とする。

題詞に「府の官人等」とあるが、歌は筑前掾門部連石足・大典麻田連陽春・防人佑大伴四綱の三人四首である。

筑前掾門部連石足は、『新撰姓氏録』大和国神別に、「門部連 牟須比命児安牟須比命之後也」とある。若冲『万葉作者履歴⁽¹²⁾』に、姓氏録を引き「伝未詳 和銅七年 壬二月朔美濃少掾正七位下門部連御立進従六位上一族坎」とある。天平二年（七三〇）正月十三日、大宰帥大伴旅人の宅で行なわれた梅花の宴に、上司筑前国守山上憶良とともに出席し「筑前掾

門氏石足」として、

うぐひすの待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ児がため（5・八四五）
の一首を詠じている。前後未詳。

防人佑大伴四綱は、旅人が帥であつた神亀から天平二年、防人司佑の官で大宰府にいたことが『萬葉集』「4・五七二」の他、「3・三二九～三三〇」によつて知られる。他に、

（大養徳）少掾大伴四綱

（正倉院文書天平十年四月の上階官人歴名。大日本古文書二四卷）

正六位上行助勲九等大伴宿禰四經（正倉院文書、雅楽寮解。天平十七年十月二十日の年紀。大日本古文書二卷）

とあつて、天平十年（七三八）四月から十七年（七四五）十月の間は、在京していたことが分る。この間に、「宴席の歌一首」（4・六二九）・「宴吟の歌一首」（8・一四九九）¹³があり、大宰府時代の三首とともに、いづれも宴席における軽快な作品である。雅楽寮解に雅楽助としての四綱の名が見えるところからも歌曲に堪能であつたろうと思われる。「五七一」の座持ち上手の性格が強く、社交的な人物であつたかと思われる。陽春との再会の機会もあつたかと想像するのもしい人物である。

三、B（5・八八四、八八五）について

題詞に「大伴君熊凝の歌二首」とあつて、熊凝臨終の心を、陽春が代わつて詠んだものである。

一首目「八八四」の、「今日や過ぎなむ」の「過ぐ」は、「みまかる（死ぬ）」の敬避表現で、仏典の「命過」の語からできた翻訳語で、後続の憶良の和する歌「八八六」に「命過ぎなむ」と照応することばで、「言問ひもなく」は言葉をかけること、言葉を交わしあうことが出来ないこと。一首の意は「故郷を遠く離れた長い旅の途中で、心も暗く、今日は死んで

しまうのか、父母と言葉を交わすこともなく。」みとる人もなく、ただひとりで「今日や過ぎなむ」という命の不安を訴えているもの。二首目「八八五」の初句「朝露」は、原文、「霧」(類・神・細など)「霜」(考)などあるが、集中、「朝露の消やすき命」(9・一八〇四)・「朝露の消やすき我が身」(11・二六八九)・「置く露の消ぬべき我が身」(12・三〇四二)とあり、人のはかない命を「露」にたとえることは、仏典・中国詩文に多く、それに拠ったもの。四句目「過ぎかてぬかも」は一首目「今日や過ぎなむ」よりいっそう切迫した臨終感がある。結句「親の目を欲り」は、中大兄皇子が亡き母斉明天皇を哀慕して歌った挽歌「君が目の恋しきからに泊てて居てかくや恋ひむも君が目を欲り」(『日本書紀』斉明天皇七年十月条)を承けているのかもしれない。一首は「朝露のようににはかない我が身、でも、他国では死ぬに死ねない。親に、目、逢いたい。」の意。

この二首一群は、結果的に山上憶良の大作「敬みて熊凝の為にその志を述べし歌に和せし六首序と并せたり」(5・八八六・八九一)を生み出す契機となった。この熊凝の客死事件と陽春との接点の詳細は、藤原芳男・芳賀紀雄の論考に譲るとして、陽春がこの二首を憶良に見せるために製作したと見る説⁽¹⁷⁾。二人の作品が共に熊凝の親元に贈られたとみる説⁽¹⁸⁾は、賛同しかねる。贈られたのは陽春作二首のみであるとみた大久保広行論考の要点を次に引用する。

当該歌の題詞の形成を、

a 大伴君熊凝誦二首 (原型)

b 大伴君熊凝誦二首 大典麻田陽春作 (本文題詞)

c 大典麻田連陽春 為_二大伴君熊凝_一述_レ志誦二首 (目録)

という段階を経たことが想像される。

当該の二首は、大典麻田陽春が熊凝になり代わって作歌したものと判断できる。熊凝が自傷歌を詠んだとすればか

く詠んだであろうという形を、陽春は示したのである。

宮中行事のための公務の途上での死去であることを考慮すれば、〈中略〉何らかの弔意の品（絶など）が府から遺族に贈られたのではなからうか。その弔意品と身辺のわずかな遺品に添えて、陽春は、一夜のうちに作歌した両首を肥後守に託し、親元に届けたのではなからうか。伝聞した悲話に強く心動かされた陽春は、熊凝の「言問ひ」を歌うのが年老いた親の心を慰めるには最もふさわしいものと考え、今わの際の熊凝の、子の至情を直接的に伝えようとしたのである。状況説明のない簡略な題詞といい、熊凝その人になりきった自傷歌的詠法といい、そのような想定に立てば初めて二首をめぐる疑問が解消するように思われる。〈中略〉憶良の作と陽春の作との間には時間的な隔たりがあると考えられ、短時間のうちに序まで付した長編を成し、相撲使の手を通じてすぐ届けることは、いくら憶良でも無理であろう。まずは孝子を喪った老親の慰撫のために、相撲使一行とかかわりの深かった大典陽春が、急いで二首を用意したのである。しかも、その二首が熊凝作の体裁をとったこと、そしてすべては陽春の意思によって行われたことが、いたく憶良を感銘させ、創作意欲をそそって長編の一作を生み出す契機になったものと考えられる。

とする見解には大いに賛同したい。陽春の二首は、大典の職務上の弔意の挨拶の歌であつたけれど、そこには、親切な真情が吐露されており、二首ともに典故のある表現であり、高く評価されてよいと考えられる。

なお、陽春が、この二首所載の『巻第五』の筆録者・編纂者の有力候補の一人であるとする説は、鋭意、検討されて然るべきかと付記しておこう。

四、C（藻105）について

近江守藤原仲麻呂の「比叡山の先考（亡父。藤原武智麻呂）のものと禪処（禪を修業する処、禪房）にあった柳の木を詠んだ」作に陽春が和した作。

近江惟帝里。

近江は惟れ帝里、

裨叡寔神山。

裨叡は寔に神山。

山静俗塵寂。

山静けくして俗塵寂み、

谷間眞理專。

谷間けくして眞理專にあり。

於穆我先考。

於穆しき我が先考、

獨悟闡芳縁。

獨り悟りて芳縁を闡く。

寶殿臨空構。

寶殿空に臨みて構へ、

梵鐘入風傳。

梵鐘風に入りて傳ふ。

烟雲萬古色。

烟雲萬古の色、

松柏九冬堅。

松柏九冬に堅し。

日月往再去。

日月往再去れど、

慈範獨依依。

慈範獨り依々なり。

近江は帝都であり

比叡は神の住む山

山は静かで俗界から離れ

谷は閑かで仏の道理が漲っている

ああ、わたしの亡父は

ここで悟って仏縁を開かれた

仏殿は空高く聳え

大鐘は風のまにまに響いてくる

もやや霞は太古の色そのまま

松や柏は三月の冬にも色あせない

月日はむなしく過ぎ去っていくが

亡父のあたたかき教えは昔のままだ

寂寞精禪處。

寂寞なる精禪の處、
せきばく せいぜん ところ

俄爲積草墀。

俄かに積草の墀に爲る。
には せきさう には な

古樹三秋落。

古樹三秋に落り、
こじゆさんしう ち

寒花九月衰。

寒花九月に衰ふ。
かんくわくぐわつ おとろ

唯餘兩楊樹。

唯餘す兩楊樹、
ただのこ りやうやうじゆ

孝鳥朝夕悲。

孝鳥朝夕に悲しぶのみ。
かうてうあしたゆふへ

寂しく静かな禪の道場も

俄かに雑草の茂る庭となつた

古木は秋にあつて落葉し

後れ咲きの花はしおれてわびしい

ただ二本の楊の樹だけが空しく立ち

鳥が朝に夕に悲しく鳴くばかりである

※現代語訳は、江口孝夫『懷風藻 全訳注』（講談社学術文庫）による。

この詩、一首か二首かの意見があり、林古溪「懷風藻 陽春の作・作者と撰者」⁽²¹⁾は、「これは二首にしてしかも別人の作と見なければならぬ」「即ち仲麻呂一首、陽春一首」「恐らく仲麻呂には、先考之旧禪廬を詠ずる作が数首あつたのであらう。その中の柳樹の作に陽春の和したのがこれである。（数首の和詩があつたかも知れぬ。）」としたが、今田哲夫「懷風藻 に関する一考察―篇数を論じて撰者に及ぶ―」⁽²²⁾が一首と見、それを承けて杉本行夫『懷風藻』⁽²³⁾は「一首の換韻の和韻の作と見るべきであらう。」とし、大系本も「前十句を仲麻呂の作、後八句を陽春の作とみる説もあるが、目録・題詞の如くすべて陽春の一首とみる。」とし、江口孝夫『全訳注』⁽²⁵⁾も「二篇として二人の応答のように見えるが、麻田陽春一人の作で、先半、後半立場を変えて詠じたものともする。」と、現行大勢は一首と見ている。一首とすると、前半十句は仲麻呂の思いを詠じ、後半八句は仲麻呂と陽春合体の情を表しているとも読めるので、『萬葉集』にみたA・Bの代作歌に通じる「思いやりやいたわりといった優しい心情が窺えよう。人情に篤い人であつたのだらう。」⁽²⁶⁾という人物像が彷彿とする。

この詩中、「唯餘」は大系本補注に、

唯余の例　タダノコス（タダアマス・ノコル）の一例。終二句より始まるものが大部分を占める。

唯余一両燄、纔得^レ解^ニ羅衣^一（梁紀少瑜、詠^ニ殘燈^一）

唯余一廢井、尚夾^ニ兩株桐^一（隋元行恭、過^ニ故宅^一）

唯余松柏隴（一本「樹」）、朝夕起^ニ寒煙^一（初唐駱賓王、丹陽刺史挽詞）

とあり、「孝鳥」は「説文曰、鳥、孝鳥也」、「鳥^ニ有^リ反哺之義^一。必^ズ有^{ラン}遠人ノ感^{ジテ}惠^ニ而來^{タル}者^一」（十六国春秋）、「鳥^ニ有^リ反哺之孝^一」、「慈鳥反哺」（禽經）とあり孝鳥の「鳥」である。また、「旧禅処」「宝殿」「精禅処」は初出であり、「修行の道場としての比叡山を題材にした最初期の漢詩である」という指摘⁽²⁷⁾も、陽春が漢籍・仏典の学識に富んでいたことを証明しているよう。「両楊樹」二本の楊の樹とあるが、『藤氏家伝』下、「武智麻呂伝」に「比叡山に登り、淹留^{とどま}りて日を弥^{わた}る。爰^{こゝ}に、柳樹^{やなぎ}一株を栽^うゑ、従者^{ともひ}に謂^{かた}りて曰^いはく、「嗟^{ああ}乎、君ら、後^{のち}の人をして吾^わが遊び息^{いこ}ふ処^{ところ}を知らしめむ」といふ。」とあつて「一株」である。「兩楊樹」としたことは後考⁽²⁸⁾に俟ちたいと思う。いづれにしても陽春の表現には典故となる漢籍・經典の陽春独自の用法があることは注意して読む必要がある。

五、おわりに

天平二年（七三〇）末に、大納言兼大宰帥の大伴旅人は、大宰府を離れ、京に帰った。そして、翌三年（七三一）七月、大伴熊凝事件、同月二十五日、旅人没。同月末には旅人亡の知らせが府に届き、しばらく帥不在の時期が続き、九月二十七日、大納言藤原武智麻呂が兼大宰帥となるも赴任せず。十一月二十二日、諸道に鎮撫使を置くも、西海道の任命はなく、実質、大納言兼大宰帥の武智麻呂がその地位にあったか。翌四年八月十七日に諸道節度使を置き、西海道は藤原宇

合が任命されているので、この頃、帥、解任か。あるいは天平六年一月十七日、武智麻呂、右大臣となり、解任か。いづれにしても、陽春の大宰府時代（大典のままか）の天平三、四年の帥は、藤原武智麻呂であり、在京の長官との職務連絡の文書のすべては、大典、陽春のかかわるところであったと思われる、帥武智麻呂との関係はかなり密になった可能性はあると考えられる。都への公務出張の折、あるいは、帰任後、武智麻呂の習宜別業での文会⁽²⁹⁾に招かれることがあったかもしれないし、その際、仲麻呂との知遇を得る機会もあったかとも考えられる。とすれば、『懷風藻』に収められた詩の背景、人間関係が了解できよう。また、藤原家と近江の関係は、天智六年（六六七）三月に、天智が鎌足とともに都を遷した地であり、鎌足は近江に隣接する山階の「山階之舎」に火葬されている（『家伝』上巻「鎌足伝」）。不比等は幼少時、山科の田辺史大隅等の家に養われ（『尊卑分脈』不比等伝）、宝字四年（七六〇）八月の勅で「追以近江国十二郡」、淡海公に封ぜられている（『続日本紀』）。武智麻呂の近江守任官記事、『続日本紀』に見えないが、『家伝』下巻「武智麻呂伝」に、（和銅）五年六月、「徒為近江守」となり善政を敷いたとある。仲麻呂が天平十七年（七四五）九月七日に任近江守となり、その没年まで近江との関係が続いた。一方、百済亡命貴族・百済人と近江の関係は、天智四年（六六五）二月に、百済の百姓男女四百余人を以ちて、近江国神前郡に居く（『日本書紀』）・天智八年是歲「佐平余自信・佐平鬼室集斯等男女七百余人を以ちて近江国蒲生郡に遷し居く。」（『日本書紀』）とあり、『懷風藻』の大友皇子の伝に、「年二十三、立ちて皇太子と為る。広く学士沙宅紹明・塔本^{たふほ}春初^{しゅんしよ}・吉大尚・許率母・木素貴子等を延きて、賓客と為す。」とあり、いづれも百済亡命貴族で、これらの大半が近江京周辺に遷居して、宮廷貴顕の邸に出入りしていたことを想定できる。藤原氏との関係もこの頃からあったと推定できよう。

ちなみに、武智麻呂が比叡山に登ったのは和銅八年（七一五）、三十五歳の時であり、仲麻呂は十歳の少年。陽春は十八歳、春初は六十代後半。仲麻呂が近江守任官の天平十七年（七四五）、四十歳で、陽春は四十八歳、武智麻呂の七回忌の年に当り、おそらく春初も鬼籍の人となっていたであろう。『懷風藻』の陽春作和詩一首の背景にはこうした人間関係、地縁

関係というもの―伝記的考証―を経た上で、よりよい考究がなされるものと思う。粗略な論稿であったが、後考を俟つことにする。

注

- (1) 別稿「麻田連陽春伝考―萬葉集人物伝研究（八）―」（「大妻女子大学紀要―文系―」44号、平成二十四年三月刊）に、その出自・氏姓名・閲歴・年齢・係累等の概略を述べたが、本稿はその続考である。
- (2) 「出発そのものをここで送ったのではなしに、出発より幾日か前に蘆城まで出かけてあらかじめ饞宴を張ったものと思われる」（沢瀉久孝『萬葉集注釈』）
- (3) 「辛人」。元、桂、類、拾・童「からひとの」神、西、温、矢、京、宮、代、孜「カラヒトノ」。「辛人ヲアラヒト、アルハ写生ノ誤ナリ。早クカラヒト、改タムヘシ。」（代釋・「辛ハ淑ノ誤ヨキヒトノ」）（考）「辛は借字にて韓なり。又は辛は淑の誤にてヨキ人か。宣長は辛は字萬二字かとも言へり。」（略解）・「辛人は、辛は、宮ノ字の写誤なるべし」「ミヤヒトノ」（古義）。近代・現代は多くのテキスト・注釈書は、「からひとの」で、「辛・韓・唐」としている。なかで、金子評釋「必ずウマビトと訓みたい。」「今この大宰府で紫衣を着得る人は、帥の君を除いては一人もない。帥の君は當時正三位であった。作者陽春は、浅緑の衣を着る七位の大典、この人達の眼からは紫の衣は遙かに縁の遠いもので、「うま人の衣染むとふ」と讃辭的に詠めたことは、處柄、人柄、蓋し當然なことであらう。」。講談社文庫（中西進）「韓人の」「カラは中国をも朝鮮をもいう。作者は百済の渡来二世。」
- (4) 内田賢徳「大伴君熊凝哀悼歌」（『ナニミ万葉の歌人と作品 第五卷 大伴旅人・山上憶良（二）』（二〇〇〇年九月））に、『釋注には従えないが、「卿を紫によそへて、さて、ここにしむといへるなり」（『攷証』）というように、この時の旅人の地位を象徴的に表して、大納言として京に遷任する主を言祝ことほいだと言えよう。そして、高官としての紫の礼服が主を象徴していつまでも心に沁みて忘れられないと主への変わらぬ敬愛を詠む。」
- (5) 大久保広行「筑紫の綿と紫草」（『文学論藻』75、二〇〇一年三月。『筑紫文学圏と高橋虫麻呂』二〇〇六年二月所収。）
- (6) 富原カンナ「熊凝哀悼挽歌」考（『萬葉』173号、二〇〇〇年五月）。『毛詩』小雅の「鹿鳴」全章を次に示しておく。新釈漢文大系（111）『詩経 中』（一九九八年十二月刊）に拠る。

鹿鳴

鹿鳴

呦呦鹿鳴 食野之苹

呦呦と鹿鳴き

野の苹を食む

我有嘉賓 鼓瑟吹笙

我に嘉賓有り

瑟を鼓き笙を吹かん

吹笙鼓簧 承筐是將

笙を吹き簧を鼓き

筐を承けて是に將む

人之好我 示我周行

人の我を好し

我に周行を示せ

呦呦鹿鳴 食野之蒿

呦呦と鹿鳴き

野の蒿を食む

我有嘉賓 德音孔昭

我に嘉賓有り

德音孔だ昭かなり

視民不佻 君子是則是傲

民に視すに佻からざるは

君子是れ則り是れ傲へばなり

我有旨酒 嘉賓式燕以敖

我に旨酒有り

嘉賓よ式て燕し以て敖べ

呦呦鹿鳴 食野之芩

呦呦と鹿鳴き

野の芩を食む

我有嘉賓 鼓瑟鼓琴

我に嘉賓有り

瑟を鼓き琴を鼓かん

鼓瑟鼓琴 和樂且湛

瑟を鼓き琴を鼓き

和樂し且つ湛しましめん

我有旨酒 以燕樂嘉賓之心

我に旨酒有り

以て嘉賓の心を燕樂せしめん

(7) 注(6)に同じ。

(8) 注(4)に同じ。

(9) 新大系本、脚注に、馬駿論文を引用している。

(10) 『懷風藻』における「歡宴」の詩、

從五位下大學助背奈王行文。二首。年六十二。

五言。秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。一首。賦して「風」の字を得たり。
 賓を嘉みして小雅を韻ひ、席を設けて大同を嘉みす。流を鑒て筆海を開き、桂に攀ちて談叢に登る。盃酒皆月有り、歌聲共に風を遂ふ。何ぞ專對の士を事とせむ、幸はくは李陵が弓を用ゐたまへ。(藻60)
 同じく「別宴」の詩、

正六位上刀利宣令。二首。年五十九。

五言。秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。一首。賦して「稀」の字を得たり。

玉燭秋序を調へ、金風月幃を扇ぐ。新知未だ幾日もあらね、送別何ぞ依々ぞ。山の際に愁雲斷え、人の前に樂諸稀らなり。相顧みる鳴鹿の爵、相送る使人が歸。(藻63)

いずれも訓読は、日本古典文学大系『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』に拠る。作者二人はいづれも百濟亡命貴族。

(11) 伊藤博『萬葉集釋注二 卷第三卷第四』

(12) 刈谷図書館蔵。国文学研究資料館蔵複写本に拠る。

(13) 武田祐吉『萬葉集全註釈』8・一四九に、「三輪の神宴の歌「宇磨佐階 瀨和能等能 阿佐妬珥毛 於辭寐羅箇瀨 瀨和能等能渡鳥」(日本書紀一六、崇神天皇御製)の歌を思っているようだ。この三輪の神宴の歌は、歌曲として歌われていたのであろう。」とある。

(14) 小島憲之『上代日本文学与中国文学 中』に、「歌としての「命過ぐ」は、萬葉集の中で憶良のこの例がひとつである。「命過」は彼の愛読した金光明最勝王經、長者子流水品に、「時十千魚、同時命過生三十三天」云々(「命過」は「命終」に同じ。長者子流水品「命終之後、得生三十三天」とある)みえ、憶良は仏典語を翻訳して歌句として採用したものではないかと思はれる。」とある。

(15) たとえば、新大系『萬葉集』(5・八八四、脚注)に、

仏典に「命は朝露の如く、暫く有るも便ち滅す」(出曜經一)、「人命譬へば朝の草上の露の若し。須臾にして即ち落つ。人命も此の如し。焉んぞ久長なるを得んや」(六度集經八)とある他、漢の古楽府「薤露行」にも「薤上の朝露何ぞ晞(わ)き易き」(初学記・挽歌)とあり、それは「人命は薤上の露の如く晞滅し易きを言ふ」(晋・崔豹・古今注)ものであった。

とある。

- (16) 藤原芳男「大伴君熊凝ノ歌」(『国語と国文学』51巻2号、一九七四年二月)・芳賀紀雄「憶良の熊凝哀悼歌」(『萬葉』118号、一九八四年六月)。

- (17) 注(4)の内田賢徳論文。ただし、「歌が熊凝の両親の下にも届けられたのかどうか、そしてその後両親がどのように老いて行ったか、誰も知らない。」とする。

- (18) 注(16)に同じ。

- (19) 大久保広行「熊凝哀悼歌群の形成」(『万葉集研究』20、一九九六年六月)、『筑紫文学圏論 山上憶良』一九九七年三月所収。

- (20) 井上通泰『萬葉新考 第二』・宮嶋弘「萬葉集卷五の編纂者附雑考」(『国語国文』9巻8号、一九三九年十二月)。

- (21) 「国語と国文学」(25巻6号、一九四八年六月)、『懷風藻新註』(一九五八年十一月)も同様。

- (22) 「国語・国文」3巻9号、一九三三年八月。

- (23) 一九四三年三月。注(6)も同じ。

- (24) 『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(一九六四年六月)なお、山口敦史「『懷風藻』の自然観と仏教思想 麻田陽春の漢詩と藤原氏の系譜」(辰巳正明編『懷風藻——日本の自然観はどのように成立したか』二〇〇八年六月)も同じ。

- (25) 講談社学術文庫『懷風藻 全訳注』二〇〇〇年十月。

- (26) 注(4)に同じ。

- (27) 注(24)の山口論文。

- (28) 注(1)別稿に、「従者の一人であったかと推定できる。そして、今、その子供同士が互いの親を思い唱和するという場面を想定したい。」とした。

- (29) 『藤氏家伝』(下巻「武智麻呂伝」)に、養老・神亀・天平にかけて「季秋すゑのあきに至れば、毎に文人才子ぶんじんさいしと、習業すげの別業べつげふに集つどひて、文ふみの会つどひを申まをぬ。時の学者がくや、競きよひて坐まに預あづからむと欲おもふ。名なづけて龍門点額りやうもんてんがくと曰いふ。」とあって、学術文芸を尊重する時代の傾向で、同時代の長屋王も作宝楼(佐保宅)で文雅の会を行なっていた。(沖森卓也・佐藤信・矢嶋京著『藤氏家伝藤足・貞徳・武智麻呂伝』注釈と研究』一九九九年五月)。

- (30) 注(29)に同じ。